

海魚



ば老をお結ば所乃以りしを

は君あしうしるまは 蟹エビの

は海日しき虫はあしむ

まゆりぬし被るは 是ハ

鏡州志波乃浦奇ろり

あし浪なまはま乃り 里の海人

まゆりまやなふ 伊勢木乃

海生ハ夕波のまらり 乃や台

月をまら演兼乃風も 秋を志

またし磨のあか人 冬塩木も

まゆり乃被をわかも ちりる

まゆりまゆ俊もまよ ば浦ま

まゆりまみもまの みたま乃

まゆりまら乃まら 尊も

るるめ哉免て飛らん羊いやく
きやう子くあまうる冬月お子
水底の月をほ透しゆるあがらぬめ
志くわたりさりるこ世なるまなづらこ
能きよく此は夜なるを子梅冬月
乃ゆる星乃けらとものほ夜のや
昔もさふたため——あまの珠を

上くは澳あまを能言へとゆる神一哉

青くははよあき——もこ乃うる遠

下くははる所月もみら——か乃く

下くははる免を心さやあふよ下くははる

の珠をくほきあき——もこの

うる遠あまうるあふとり

下くははるい浦乃登り——るるま

あまのあまの里とありありと
しるは海生人乃位新のしるは
しるは又是なり志万は海玉を
とまありしりしりみりしり
よはるあしりしり珠珠とあり
新珠島とありしり 早 極しり大合しり
必をありしり 三 中しり

秋は乃像ありしりしり
おのえな被たありしり西ありしり
よはる面を向ありしり
しりしり面を向ありしり
早 加禰の寶を向ありしり 三 漢朝ありしり
もわしりしり 三 大臣ありしり
漢海公の御妹ハる言字皇帝ありしり

后よたゞせ折ぶごう折んそ氏奇
なまきふとく無福さへ三の寶を
またさるる東原整酒濱石面向
不肖能むじは乃寶ハ京美—
明珠ハは澳少う就字へとと折
—を大折は方をやほ—この
浦ハ万里こたまりの然交蟹し女と

ちちをこめひとわ此は子哉
まふたぐれ房崎乃大折是なわ
やあつよ是さう房崎の大臣よ
あつなほ—折海生人や猶こ
後まらん^三意は折方やととを
能心のも〜ちち思ひは折し
板ハ折方乃らんよととや意

みよき

ひきあめい
大臣乃

御子とむす神がをみひき

藤乃つぐり神はあつた日

子ノ冬ノの才強里了母志

下
何家と羨七心

系
母ハ鏡也

志波の浦有瑞乃あまをりさ皮

なう神あるをくそ云葉を子

板ハ神寺海生此子志波のり徳

に屋とわろ家や

う神とくも希本子くさリ

前も月のひるる雨露の母よ

あつひやと思へた神来里たわ

あつるはくし徳あまのりや

くるりあふりは目よりきく
 心こころもくたゞひかへりてん
 心こころもくたゞひかへりてん
 阿まらひひせぬまよ羊詩く
 かさぬ事だたうままなま
 内目よのひく早はう
 万なふり清めにけり

ぞ時海生人中やうまに玉城
 麻えくまげはるをくはら
 清位よなたまん心り
 子細あと飲まりたまのふ
 梅ハ我子故しりせる露たも
 懐くくと牙の繩を腰よ
 けきもこの玉を方はたらん

此繩をうこりしありて其時人々

力を添ふあき妙く是物束

ひとほの利根をぬきもたす

波海庭に飛入るをいひとほみ

雲乃波烟乃方欠城志のまつ

海漫くとか入て直下とていふた

うこもなく色もまじりぬ海庭よ

ぐも神霞ハツキきり雨多ん

まもる不さなわりのうたをい

いし里うき中をみまはる言を

三十丈のむ塔よは玉代にめ置

花をうなるも護神ハバ新並

看くわすあ志魚解乃口のり物

ふいしやわりのあざりり母成此

故つ乃ころきあお浪乃
あなころりガのひさくん父
大行もおころ母ざんも
は快よあも果なん出さ
後くスえさちみ思ひ物
手を合さ南無や三波寺の観音
薩摩北ころ城あけさるたひ

あまのころりガのひさくん父
大行もおころ母ざんも
は快よあも果なん出さ
後くスえさちみ思ひ物
手を合さ南無や三波寺の観音
薩摩北ころ城あけさるたひ

乳乃志こ城しよ物かを押こめ
片乳さを控了う中たわろ志
就字のなひり死人を叫めま
あたらわろちのほく忠就なり
物来乃あわをうこり勢い人
し後しひ引あきこわろわま
志しひあま人を海とようしひ

出ころか
う折とも忠就のわきとみえ
五折もほろしひあんに成ころ
だがもしほろみあわぬも
其取しきなわきぬも大臣
款交折ふぞ対色の志こしわ
やう系乳乃あたらわをほ誘せ

あまをいりしおなをいし事

よき山程に御を宿をひらき

内務をさし候うしりまを

よき

相ハ七母乃手跡のまびき

みまは江上りまを了一十

三日程を白河に埋す日月に

まをぬり路留るたわまゆ

とぬ人用君ま行しを

わりの間をさしきよる

しわ冬十三年 相ハ

所をいしとやしむは奇の

下法をいしおなを向る花乃道此

ぬ程をいし乃善をいし

上

字は無人弱 後

後

法界の徳用入り下て天新八部
人自非人下は見え新女成佛
ぞくちう下鑛物志波と号し
毎年ハ穰谷乃勅行佛法
惣局乃靈地下と名付も以て書と

志や字城う上く係が幾く轉讀
一上たものふ下へ上流を飛下ぬお
遍照教十方上微め流行方具お
三十二上心八十程ぬ上用庄嚴

